

想像パレット



企画書



絵を描くとき

像を彫刻するとき



音を奏でるとき



作品に命が吹き込まれ、動き出す
若き芸術家たちの物語

企画意図

この作品は

「モノを作るとはどういうことか」という問いに真正面から向き合った作品です。

物語に登場する若き芸術家たちは、「自尊心」「将来の不安」「自分のスタイル」などととても身近な悩みを抱えています。

彼らの悩みについて
視聴者の方々も一緒になって
考えていただけたなら、
そこに意義が生まれるのかなと思います。

加えて

「表現力あふれるオリジナルのアニメーション作品」であることに強いこだわりを持って企画しました。この作品の目玉である「具現化」シーンのような、小説や漫画ではなく、アニメーションだからこそ映える映像作品を作りたいと考えました。



設定

霊化・具現化

芸術家が作品を描くとき、作品に強い思いや感情が乗ると、「霊化」という現象が起き、その作品に不思議な力が宿る。そして非常に強い霊化の場合、作品に命が宿り、実体化する。これを、「具現化」という。この能力は本人の意識のあり方によって上手くコントロールすることもできれば、制御できずに暴走してしまうこともある。

精華高校

主人公たちが通う精華高校は、霊化能力を持つ若き芸術家たちを守るために存在する高校。この高校は精華神社の敷地内にあり、神社の敷地内でのみ具現化現象が起きます。

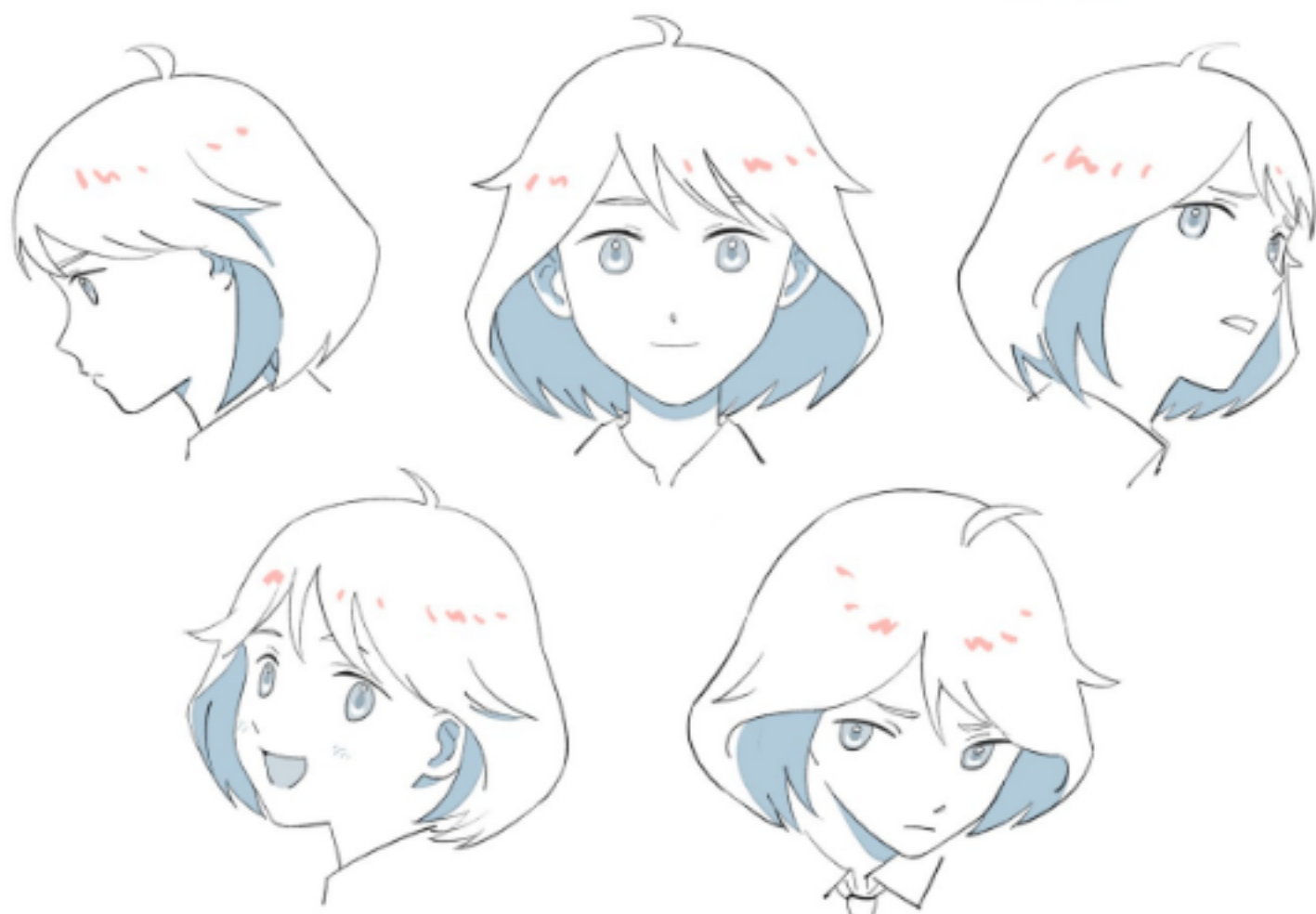
キャラクター設定

一色えのぐ

主人公 高校1年生 絵描き

普段は引っ込み思案で、1人で絵ばかり描いている。
ただここぞという場面では、
言葉を振るわせながらもしっかりと大切な言葉を伝えることができる、心の強い少女。

描いた妖怪や化物を具現化する。
霊子先生の指示で、ばら撒いてしまった具現化生物たちを
回収することになる。

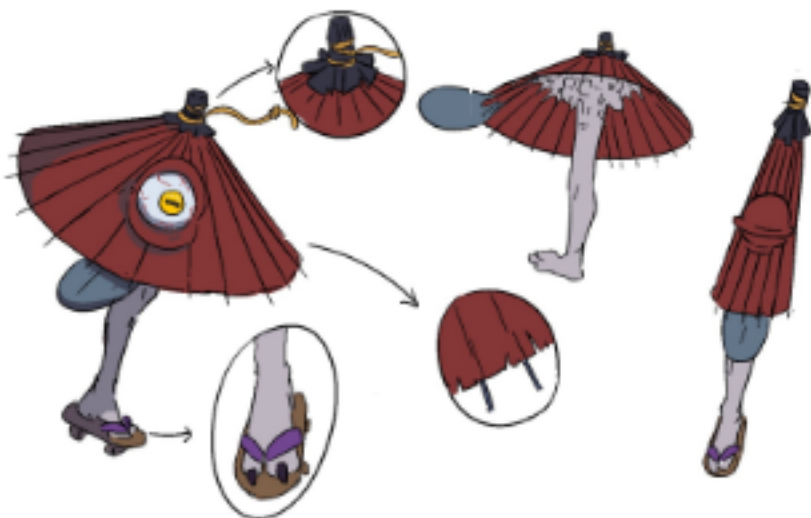




↓具現化イメージ



えのぐが具現化する生物

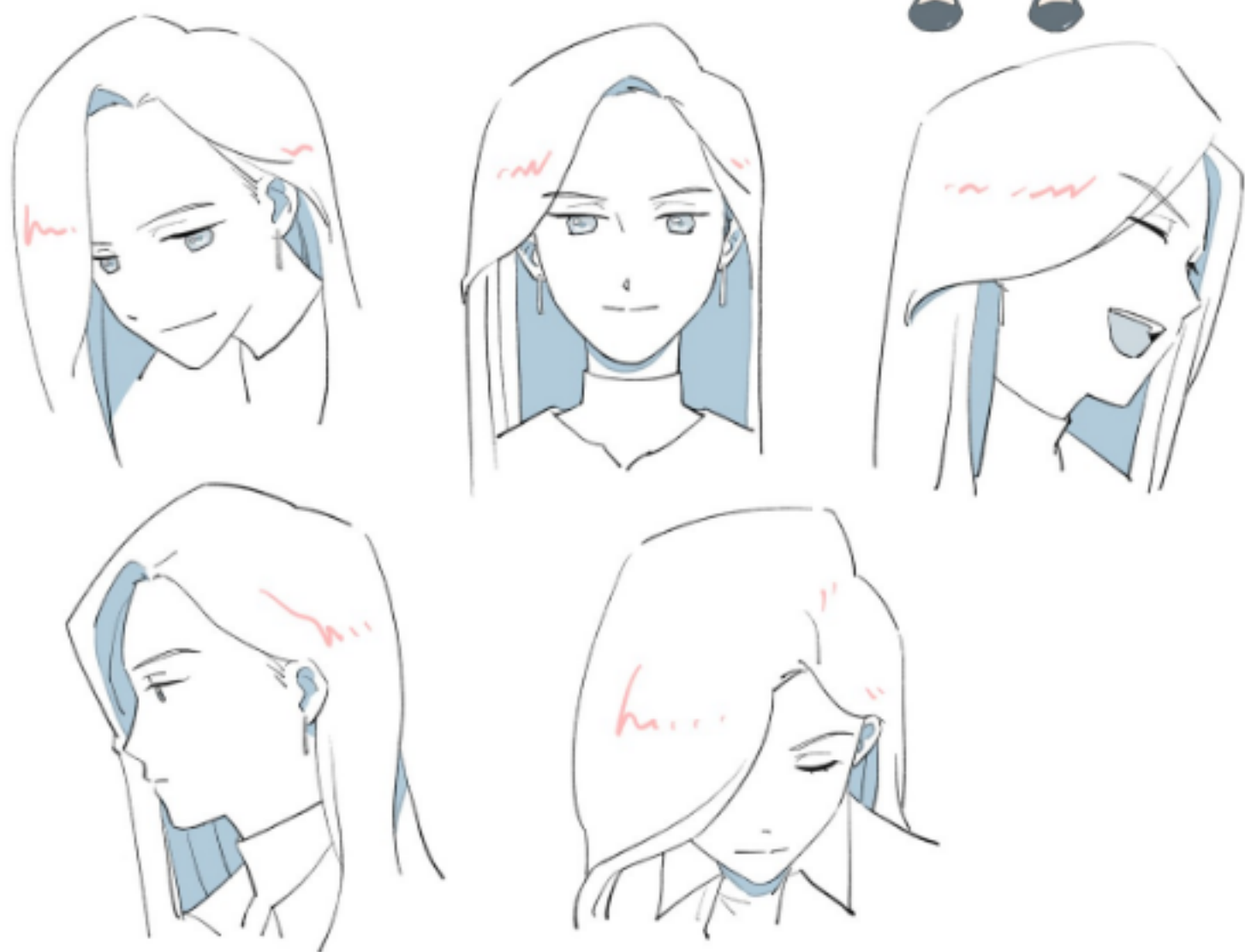


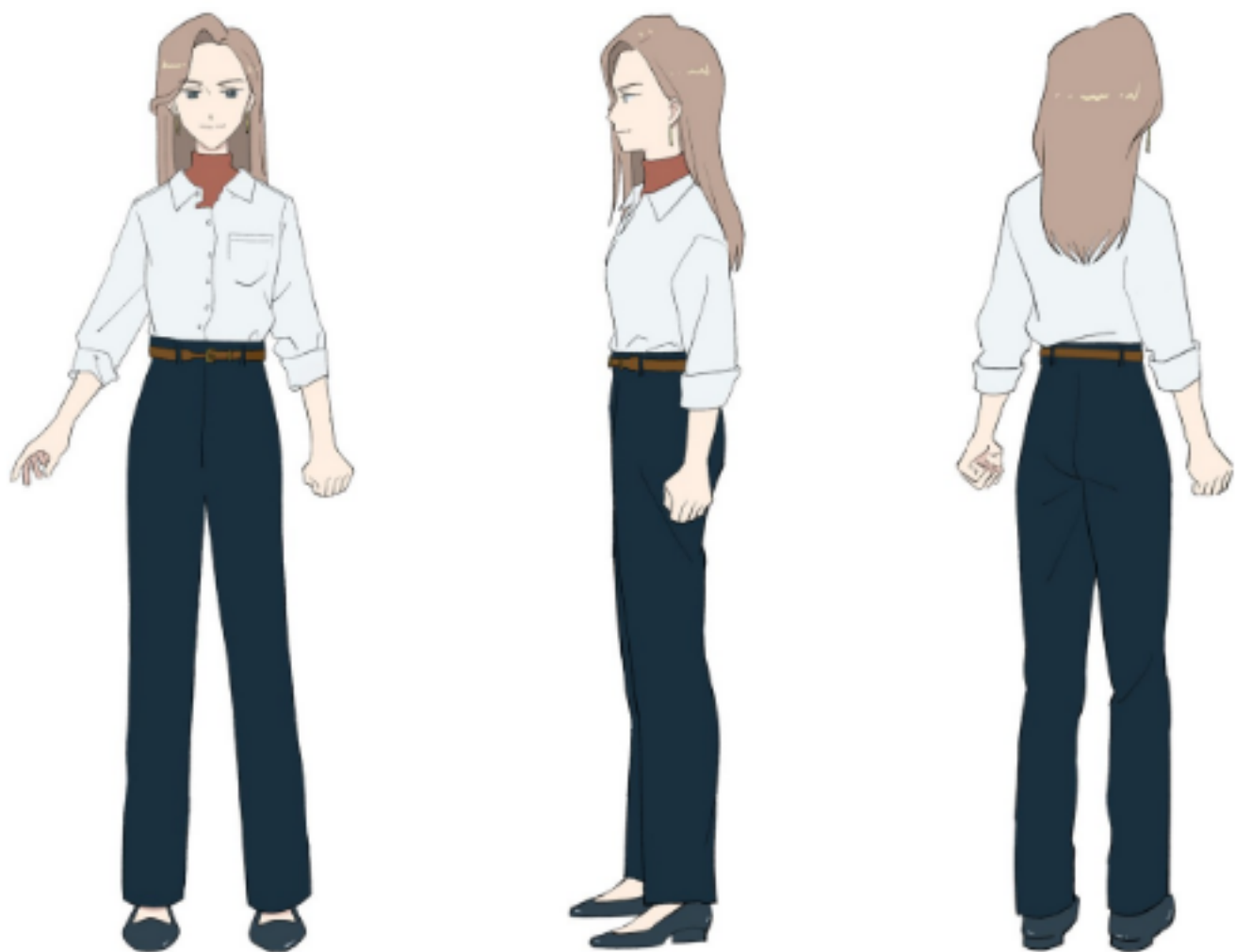
久石靈子

精華高校教師 美術部顧問 絵描き

絵具と同じく描いた絵を具現化する。
通称「靈子先生」

絵師として名を馳せており、高い技術を持つ。
加えて霊化・具現化能力に関してもスペシャリストで、
作中で最も優秀な能力者である。
絵具が困った時に助けてくれる、師匠のような存在。





↑ 靈子先生が普段使用している学校のアトリエ

元宮典文

高校1年生 古典部

精華高校唯一の古典部員。

霊化能力を持たない一般生徒だが、
特別に霊子先生から霊化に関する情報を教えてもらっており、
特製のメガネを介して具現化生物を見ることができる。

持ち前の知識量と頭のキレで、
問題が起こった際にえのぐの助けとなる。



神宮寺匠

高校2年生 工芸部 彫刻家

制作した彫刻作品が具現化して動き出す。
木材の彫刻を得意とする。
仏教や神道をモチーフとした作品づくりに関心があり、
仏像や神像などを中心に彫刻している。

一流の彫刻家になるために、両親の反対を押し切り、
精華高校で彫刻の勉強に励んでいる。





匠の具現化イメージ→



↑匠が具現化する生物

精華音色

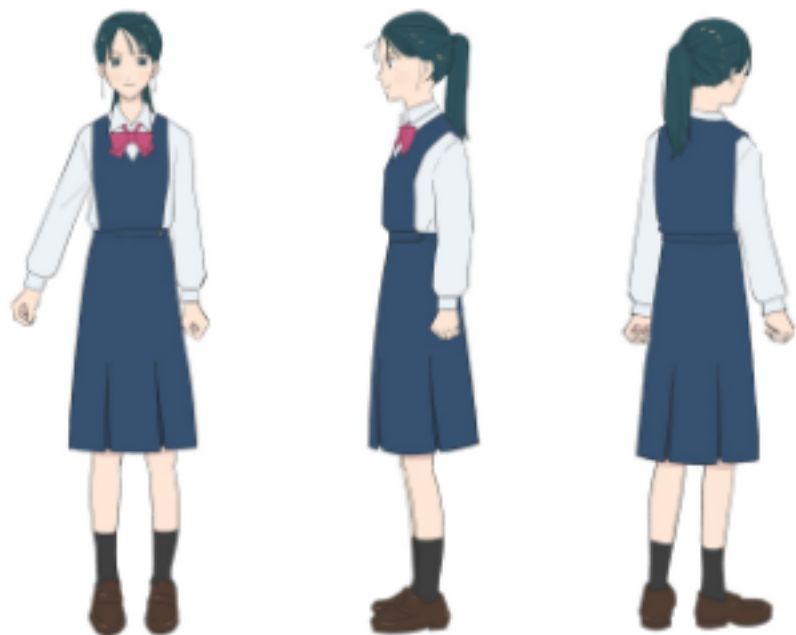
高校1年生 雅楽部 龍笛奏者

雅楽の管楽器である龍笛を演奏することで、龍を具現化する。

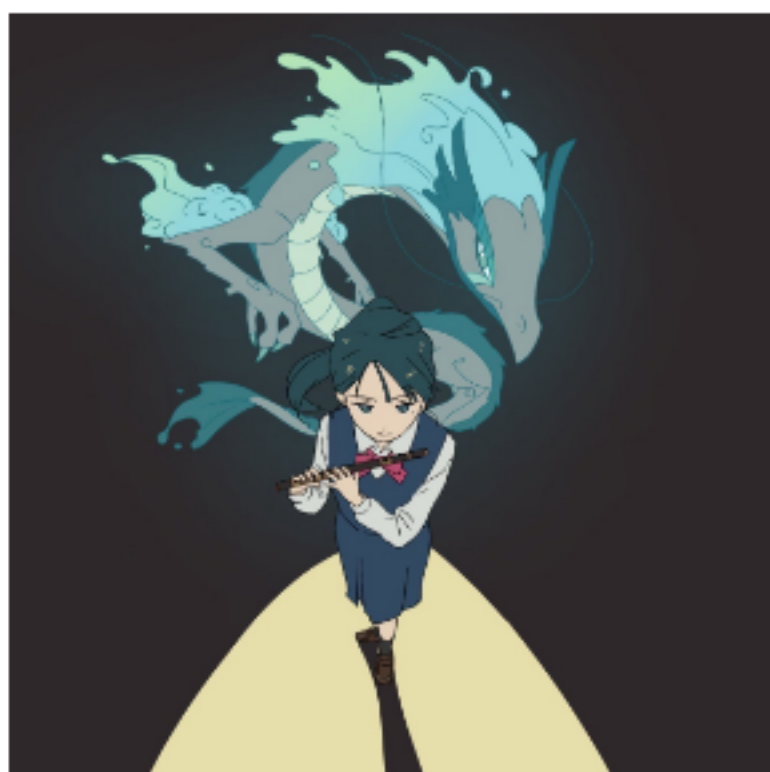
精華神社神主、精華庵司の一人娘であり、神主の跡取りとして期待されている。しかし本人は神社のことを強く嫌っており、跡を継ぐ気はない。

跡取りとして育てられてきた環境の中で唯一自分の意思で始めた龍笛に強いアイデンティティを抱いている。





音色の
具現化イメージ→



←音色が
具現化する生物

見どころ・エンタメ性

芸術×バトル

作品が具現化するという設定を用いることで、「芸術」という分野と「バトル」という分野が組み合わさり、珍しい題材となっています。

各キャラクターによって具現化の表現やデザインが異なり、視覚的に楽しめる。

日本文化

舞台、登場する部活、具現化生物など、基本的に日本文化を題材とした作品となっています。

加えて、文化やしきたりの紹介が多いこともこの作品の特徴の一つです。

隠れ設定・伏線

この企画の特徴の一つとして、「隠れ設定」や「伏線の」多さがあります。神社の秘密やえのぐの過去など、物語が進むにつれてさまざまな事実が明らかになり、壮大なストーリーへと変貌していきます。

第1話 あらすじ

一色えのぐは、絵から生き物たちが実体化するという奇妙な体験をした。初めは面白がっていたえのぐだが、ある日怪物キマイラを描くと想像以上に凶暴な化け物として実体化してしまい、えのぐは他の生き物たちと同様に家から逃げ出したのだった。

そうして絵から出てきた生き物たちはどこかに行ってしまう、そんな状態のまま精華高校への入学が近づいていた。入学式を数日後に控えるある日、えのぐは一足早く学校を訪れる。するとそこで、外に出してしまった具現化生物の一体、猫又と出会い、猫又を追いかけた先に、あるアトリエに入る。そこには猫又を抱いた大人の女性が立っていた。

女性の名は久石霊子。

この学校で絵の講師&美術部の顧問をしている。

そこでえのぐは、霊化・具現化現象やこの高校のことを霊子先生に教えてもらう。

そして先生の指示で、外に出してしまった具現化生物たちを回収することになった。

まずは特に野放しにできないキマイラを捕まえることになり、霊子先生はえのぐに古典部の典史なる人物に会うよう勧める。

書庫に行くと、元宮典文は座って本を読んでいた。

彼には霊化能力は無いが、この能力について調べているらしく、霊子先生から特別に霊化能力について教えてもらっているのがあった。典文は猫又を見て目を輝かせる。神話や歴史上の逸話に目がない彼は、妖怪や架空の生き物を具現化するえのぐの能力にとっても興味があるのだった。

猫又の話になり、えのぐが昔飼っていた猫と猫又を重ねている、とえのぐは昔語りを始める。

子供の頃、自分の描いた絵を友達など周りの人から酷く言われた経験があり、それ以来描いた絵は当時飼っていた猫にしか見せていなかったという。昔のことを思い出し、自分の絵を卑下する態度をとる。すると、猫又は機嫌を悪くしその場を去ってしまう。

その後えのぐと典文はキマイラの対処法を考えるため偵察に行き、校庭でキマイラを見つける。

神話通り、ライオンと山羊の首に屈強な四肢、蛇の尻尾を持ち、炎を吐く化け物を前に、えのぐはキマイラと一対一で話をしたいと言い出す。止める典文をよそに、キマイラの前に立つ。えのぐは今まで、自分の描いた絵に自信を持てていなかったと伝える。ただ今はもうそうではなく自信があるんだ、と言いかけた時、えのぐの言葉が詰まる。それと同時に、キマイラがえのぐに襲いかかる。咄嗟に典文が飛びついて助け、2人は命からがら、キマイラから逃げる事ができたのだった。

悩んでいたえのぐに、霊子先生は励ましの言葉をかけるが、えのぐには伝わらない。

そこで霊子先生はえのぐの絵を美術部員たちに見せる。すると、えのぐの絵は部員たちの関心を大きく引き、大好評を得る。部員たちに、描いた妖怪たちの絵について説明していると、だんだん自分の絵に自信が湧いてくるえのぐ。いつのまにか猫又が現れ、えのぐの頭の上に乗り、誇らしそうに座っているのだった。

翌朝、えのぐと典文はキマイラ討伐を決行する。

まず典文がキマイラを体育館に誘い込む。

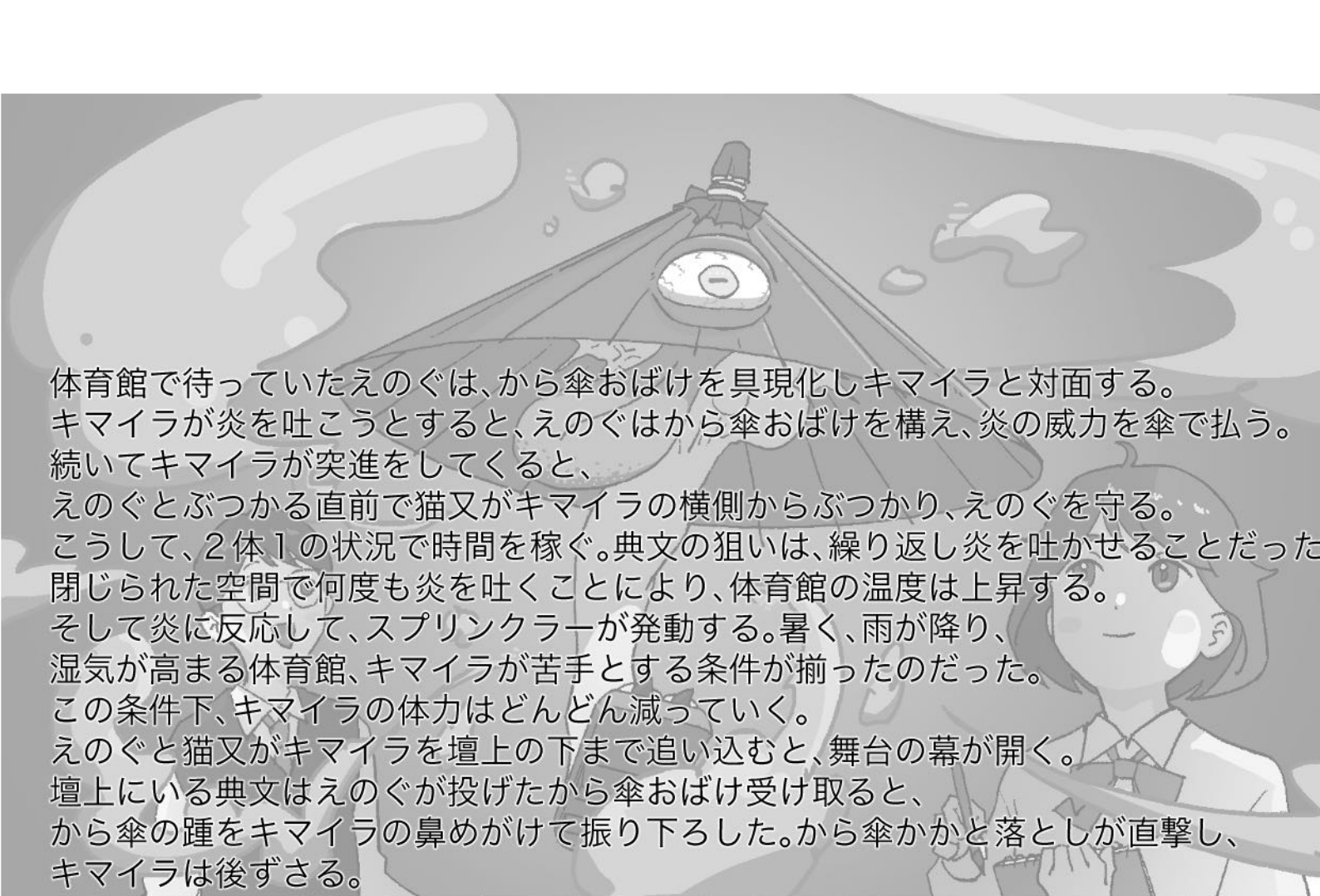
～回想～

どんな化け物だとしても、生物なら必ず弱点はある。まず鼻だ。生き物の構造上、鼻に大きなダメージをくらうと、どんな生物でも大ダメージになるという。

そしてライオンは暑さに弱く、山羊は雨と湿気が苦手。ここを突くしかない。そのためには体育館が最適であるというのが典文の考えだった。

そして典文は、えのぐが現在唯一具現化できる生物「から傘おばけ」を具現化するように頼むのだった。

～回想終～



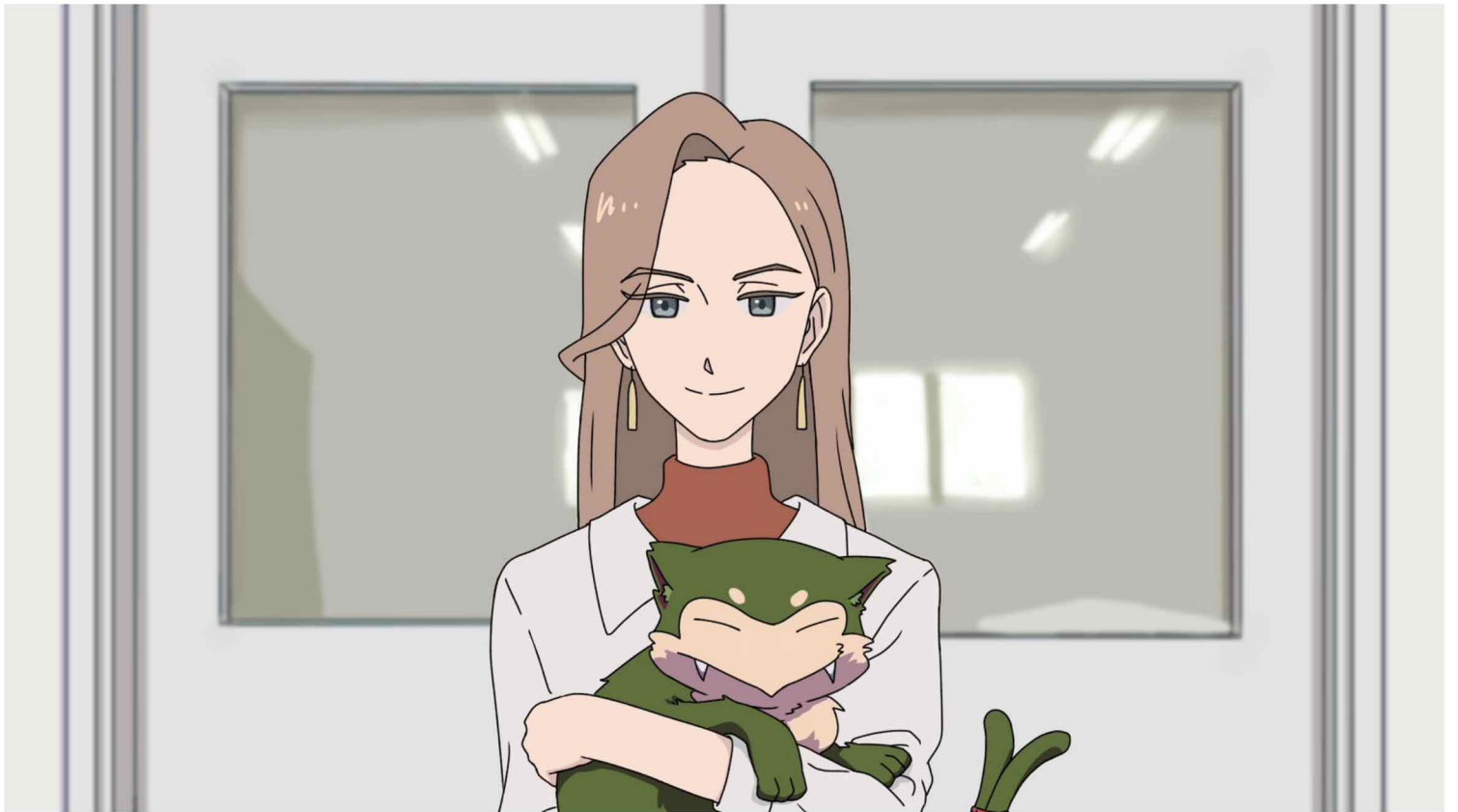
体育館で待っていたえのぐは、から傘おぼけを具現化しキマイラと対面する。キマイラが炎を吐こうとすると、えのぐはから傘おぼけを構え、炎の威力を傘で払う。続いてキマイラが突進をしてくと、えのぐとぶつかる直前で猫又がキマイラの横側からぶつかり、えのぐを守る。こうして、2体1の状況で時間を稼ぐ。典文の狙いは、繰り返し炎を吐かせることだった。閉じられた空間で何度も炎を吐くことにより、体育館の温度は上昇する。そして炎に反応して、スプリンクラーが発動する。暑く、雨が降り、湿気が高まる体育館、キマイラが苦手とする条件が揃ったのだった。この条件下、キマイラの体力はどんどん減っていく。えのぐと猫又がキマイラを壇上の下まで追い込むと、舞台の幕が開く。壇上にいる典文はえのぐが投げたから傘おぼけを受け取ると、から傘の踵をキマイラの鼻めがけて振り下ろした。から傘かかと落としが直撃し、キマイラは後ずさる。

倒したと思った瞬間、典文はキマイラの腕で弾き飛ばされた。有効な一撃ではあったが、倒しきるまでにはいかなかったようだ。キマイラが続けて典文に襲いかかろうとした時、えのぐが「やめて！」と叫びながら両手を広げて立ちはだかる。「あなたは美しく気高き獣のはず。もう無闇に人や物を傷つけるのはやめて！私が描いたのは、そんな愚かな獣ではなかったわ。」とキマイラに向かって怒りの声をあげる。そして、私はもっと成長して、きっとまた貴方を迎えに行く、それまで待っていてほしい、と伝える。キマイラはしばらくえのぐを見つめ、ゆっくりと体育館から去っていく。

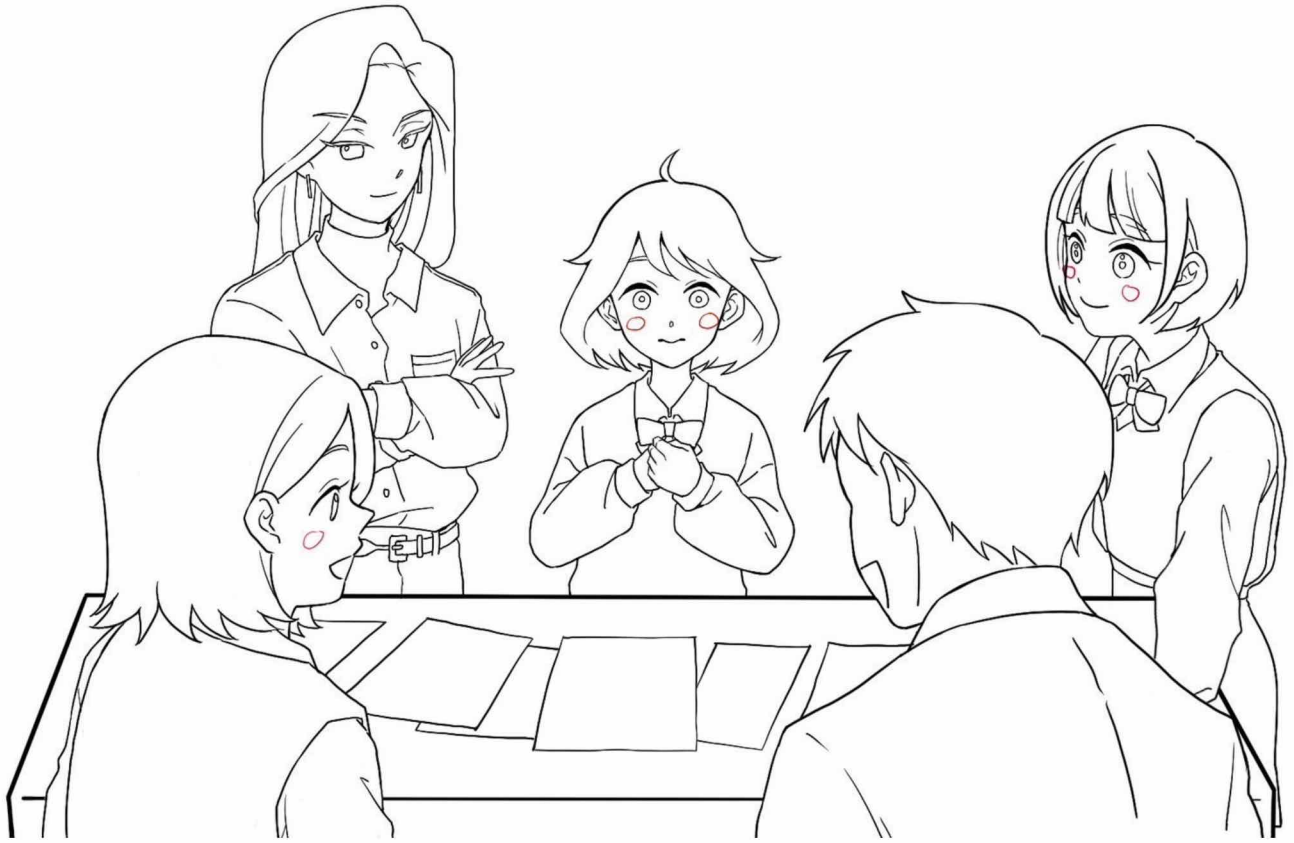
典文は幸運にも軽症で済み、キマイラもそれ以降学校に姿を現していない。霊子先生曰く、おそらく神社境内の森のどこかにいるという。何事もなかったかのように、入学式当日を迎える。ただ、入学式を迎えるえのぐの目は、初めここに来た時とは変わっていた。まるでこの学校で出会う全ての出来事に、立ち向かう覚悟ができたかのような目つきだった。

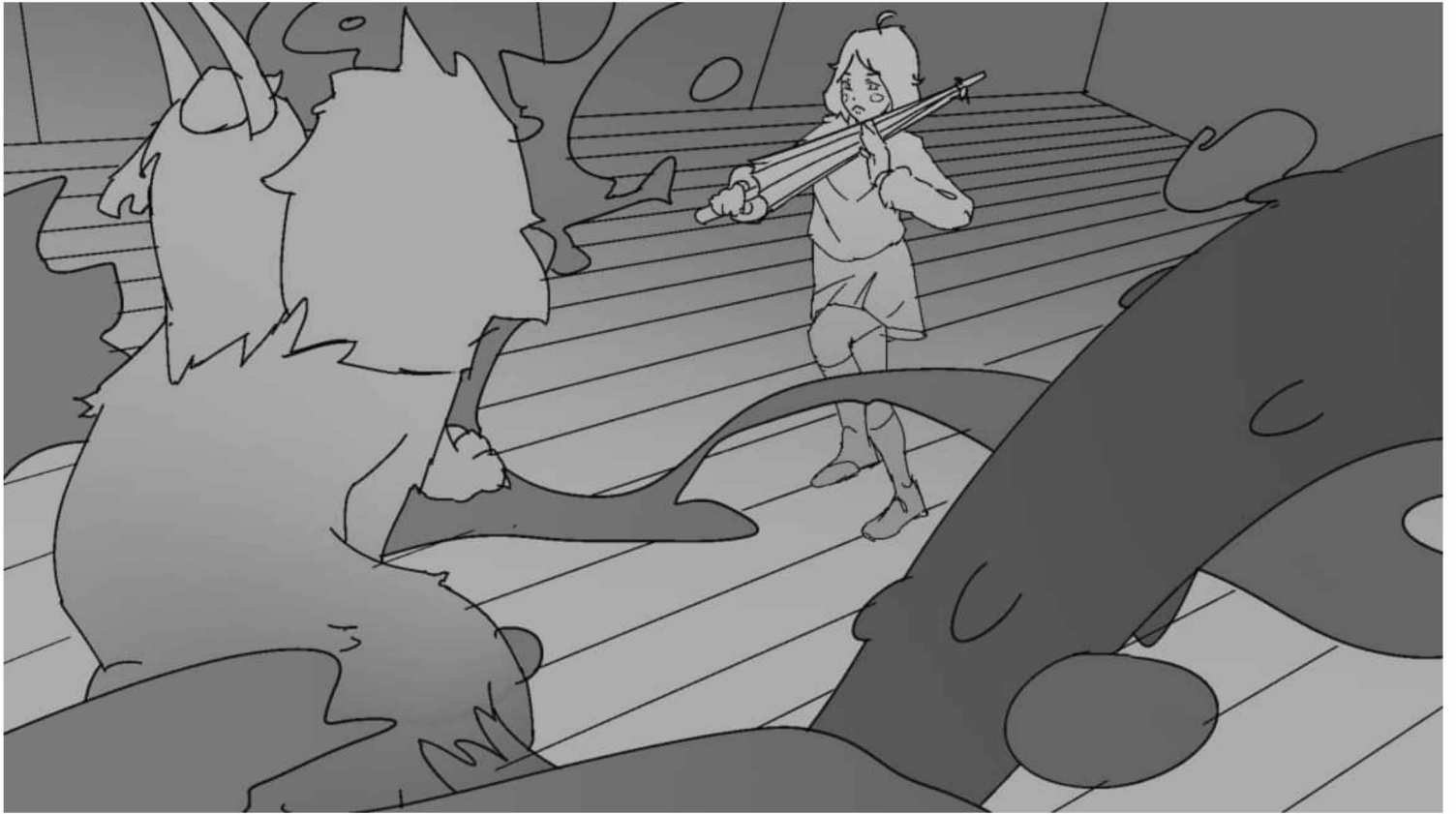
第1話 完











各話構成

- 1話 導入
- 2話 //
- 3話 工学部 匠編
- 4話 //
- 5話 //
- 6話 //
- 7話 雅楽部 音色編
- 8話 //
- 9話 //
- 10話 //
- 11話 //
- 12話 えのぐ編
- 13話 //
- 14話 //
- 15話 //
- 16話 //

第1話

えのぐ 入学式前に精華高校を訪れる
霊子先生、典文、猫又、キマイラ登場
えのぐ・典文・猫又vsキマイラ

第2話

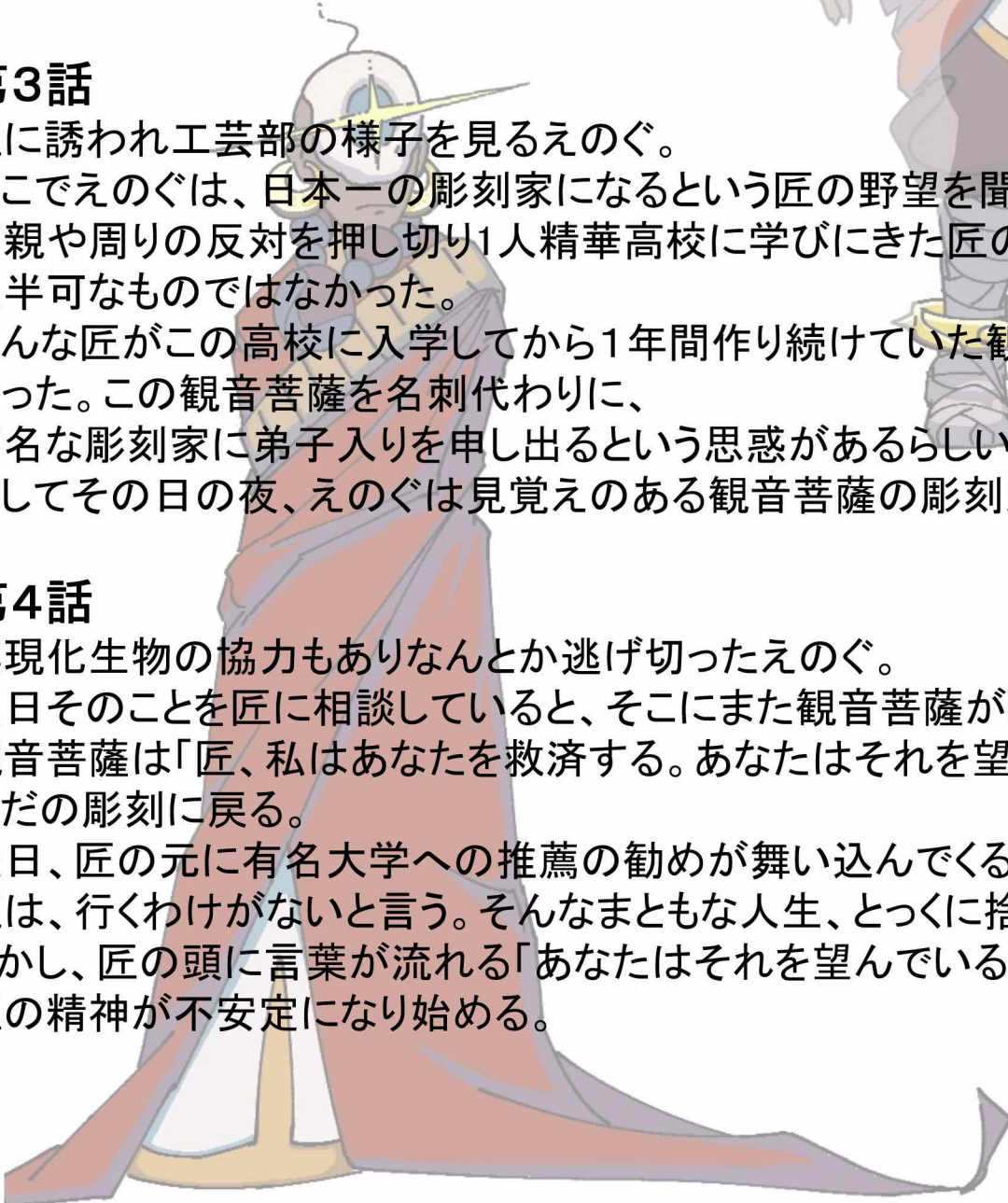
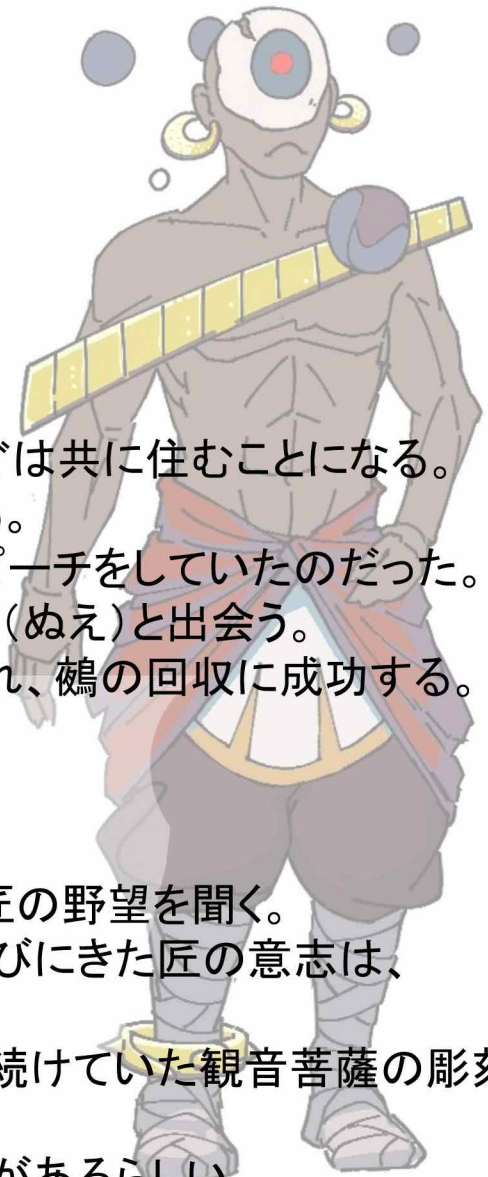
神社関係者が住む社務所で、霊子先生とえのぐは共に住むことになる。
キマイラ騒動から1週間がたち、入学式を迎える。
そこでは精華音色と言う少女が、主席としてスピーチをしていたのだった。
放課後、えのぐは具現化生物の一体である、鶴(ぬえ)と出会う。
対戦になると、通りかかった神宮寺匠に助けられ、鶴の回収に成功する。

第3話

匠に誘われ工芸部の様子を見るえのぐ。
そこでえのぐは、日本一の彫刻家になるという匠の野望を聞く。
両親や周りの反対を押し切り1人精華高校に学びにきた匠の意志は、
生半かなものではなかった。
そんな匠がこの高校に入学してから1年間作り続けていた観音菩薩の彫刻が
あった。この観音菩薩を名刺代わりに、
有名な彫刻家に弟子入りを申し出るといふ思惑があるらしい。
そしてその日の夜、えのぐは見覚えのある観音菩薩の彫刻から攻撃を受ける。

第4話

具現化生物の協力もありなんとか逃げ切ったえのぐ。
翌日そのことを匠に相談していると、そこにまた観音菩薩が現れる。
観音菩薩は「匠、私はあなたを救済する。あなたはそれを望んでいる」と言い、
ただの彫刻に戻る。
後日、匠の元に有名大学への推薦の勧めが舞い込んでくる。
匠は、行くわけがないと言う。そんなまともな人生、とっくに捨てたさ。
しかし、匠の頭に言葉が流れる「あなたはそれを望んでいる」
匠の精神が不安定になり始める。



第5話

匠の生き方に嘘はなかった。本気で夢を目指しているし、全く後悔はない。しかし、ふとした時に圧倒的な恐怖を感じるがあった。本当に自分は彫刻家として成功できるのだろうか？ 独りよがりではないのか？ その世界に入れば一瞬で現実を見るのではないのか？ なんの根拠もない恐怖だが、否定できる根拠もなかった。その恐怖を、1年間もの間観音菩薩に練り込んでいたのだ。だから観音菩薩は、匠に「平穩」を与えようとした。不安定な夢を追いかける道ではなく、安定して落ち着いた道を進むことこそが、匠への救済だと観音菩薩は判断したのだ。観音菩薩は、えのぐをその救済の障害として認識していたから、攻撃をしたのだった。

第6話

観音菩薩がもう一度匠に語りかける「あなたはそれを望んでいる」。しかしそこに、えのぐが割って入る。「匠くんの将来を、勝手に決めるな！ 迷ったっていいじゃん。一つの感情しか持たない人なんていないんだから、匠くんが恐怖を感じることはとても自然なことだよ。そしてその上で、匠くん自身がどうするか決めるべきだよ！」その言葉を聞き、匠は菩薩に向かって走り出し、具現化の力を使って空中に飛び出す。落下地点の観音菩薩に拳を振り下ろし、木っ端微塵にぶっ壊した。「救済はいらない！ 自分の力で掴み取ってみせる」。呆然とするえのぐ。1年間作り上げたものを粉々にしたのだ。匠もはっと気づき、「やっちゃったー！！」と叫ぶ。しばらくの間、2人は大笑いしていたのだった。

第7話

具現化能力の異質さを注目されるえのぐは、精華神社本殿に招かれる。そこで神主の精華庵司と、その一人娘の精華音色と出会う。典文曰く、音色は学年一の有名人だという。精華神社の跡取り娘でありながら主席で入学。その上雅楽部では、その凛とした姿で誰よりも見事な演奏をする、才色兼備とはまさに彼女のためにある言葉だった。その後えのぐと典文は、雅楽部の練習合奏を見ることができ、その時、音色の奏でる龍笛(りゅうてき)から、見事な龍が立ち昇った。

第8話

音色が具現化能力者であることに驚いていると、音色の方からえのぐに話しかけてくる。のぐの具現化能力に興味があるらしく、2人でしばらく話をする。するとそこに霊子先生が現れ、今度神社本殿で行われる「大祓」という儀式で、音色に演奏の主演をしてもらいたいと頼む。しかし音色は即座に断る。「こんな神社の儀式なんて、参加するわけない」

第9話

生まれた頃から神社の跡取りとして育てられてきた音色には、自分の意思で決めたものがなかった。親が決めたものを勉強して、食べて、着ていた。そのような日々を送る中で精華神社に対する憎しみが募り、そんな中音色は龍笛と出会った。親ではなく、初めて自分で選んだ龍笛に、次第に多くの時間を割くようになっていった。龍笛は、音色のアイデンティティそのものだった。数日後、生徒たちの前で雅楽部が合奏をすることになり、本番直前、音色はえのぐに打ち明ける。私は大学に進学して、いつかは龍笛や雅楽に携わる仕事をするつもり。絶対に神主にはならない。すると後ろから「いや、おまえは神主になる」という声と共に、精華庵司が現れる。「正直に打ち明けよう、音色。おまえが龍笛を吹いているのは、私たちの思惑通りなんだよ」

影のグラデーション

第10話

精華の一族は代々雅楽や舞踊を得意とする。それらの霊化の力を持って、神社を支えるのが役目であった。音色の反抗的感情に気づいていた庵司は、あえて直接は教えずに、音色本人が手を伸ばせる場所に雅楽を置いていたのだった。その事実を聞き強く動揺したまま、音色は合奏に向かう。音色の龍笛からどす黒い龍が立ち昇り、暴走が始まった。建物を壊してどこかへ飛び立った龍を探すため、えのぐは虚な目をした音色を引っ張っていく。えのぐの具現化生物の一体である河童が現れ、龍の元へ案内される。えのぐが戦おうと横を見た時、音色は龍笛を吹こうとはしなかった。

第11話

唯一の魂の宝物に裏切られたと感じた音色は、声も出せずに涙を流す。それを見たえのぐは、叫ぶ。「音色の魂はそんなに小さいものなの！？最初始めたきっかけとか、どうでも良いじゃん！今音色が龍笛を、そして龍を愛しているかどうか、それだけでしょ！」
「あんたに何がわかるの？」龍と河童を前に喧嘩をする2人。えのぐとの言い合いが終わると、音色は前を向いた。神社がどうか、凄くどうでもよく感じたのだ。龍笛が、雅楽が好き。それ以外今は要らなかった。2人で協力して龍を倒し、音色は龍を、えのぐは河童を回収することに成功する。真正面からぶつかったことで、2人の間には強い絆が生まれていた。

第12話

写真部に、ある1人の少年がいた。彼はこの学校が好きだった。なぜなら、病的な程に命が満ち満ちているから。そんな世界にこそ、おもしろい「画」がある。彼は今日もその「画」を求めて、歩いていた。その頃えのぐは、キマイラに向けた「成長して、きっといつか迎えに行く」という言葉を思い返す。自分は変われているのか、思いを巡らすえのぐは、幼少期のことを思い出す。えのぐは幼少期に両親を亡くし、それからは終末療養施設という特異な環境で育った。そこは寿命を宣告された患者が最後に向かう場所であった。えのぐにとってはそこの入居者が家族というような環境であった訳だが、当然多くの「死」と触れ合ってきた。えのぐは早いうちから「死」を理解し、それと向き合ってきた。初めて死と出会った時に、えのぐは絵を描きだした。そしていつの間にか、妖怪や異形のものを描きたがるようになっていった。霊子先生が庵司神主に今の内容を伝える。2人はこう考えていた。「一色えのぐは、この学校で最も飛び抜けた霊化能力者であり、最重要危険人物である」

第13話

患者が亡くなる度に、えのぐはその患者のことを思い絵を描く。その工程を繰り返すことで、えのぐの創作力は常人とは違う方向に発揮され、そこに強い感情がのるようになり、あまりにも強い霊化能力を宿した。だから精華神社から遠く離れたえのぐの自宅で、具現化現象が起きたのではないかと、霊子先生は考えていた。この高校に来た頃は具現化生物が散り散りになっていて、えのぐの霊化能力は平凡なものに見えた。しかし回収を進める毎に、えのぐの存在感は増していた。自分の過去を思い返したえのぐの目には、光がなかった。私には本当の家族がいない。大好きな人は、みんな去っていった。私は、いつまでも1人だ。成長なんかしてないよ。写真部の少年が持つカメラは、えのぐの表情を捉えていた。少年は震えた。その画には、おぞましい精神が写り込んでいた。少年は呆然とし、カメラを下ろす。するとカメラから具現化現象が起こる。もう1人のえのぐの精神が、カメラから抜け出していった。

第14話

暗い顔のえのぐが心配になり典文は声をかける。些細なことだが、えのぐはそれがとても嬉しかった「1人じゃないよね…？」するとえのぐの前に、カメラから具現化された「分身」が現れる。「勘違いするな、私たちは1人だよ。肝心な時には誰も助けてくれないさ」そんな言葉に、えのぐはしばらくの間悩まされる。霊子先生が違和感に気づき、えのぐにアドバイスをする。「誰かに頼ることを覚えなさい。人の為なら何でもできるのに、自分のためには何もできない、えのぐの悪いところだ」それでも俯くえのぐ。霊子先生は不安だった。爆発しないだろうか…。そんな時が続いたある日、えのぐが神社境内の森の中を歩いていると、何か大きな気配を感じる。そちらに向かうと、ひらけた空間があった。そしてそこに、優雅に佇むキマイラの姿があった。

第15話

えのぐはキマイラに近づき、向かい合う。キマイラの表情には慈愛が満ちていた。えのぐは語りかける。「私、成長してるのかな？」その時、キマイラの表情が強い威嚇を表す。えのぐが後ろを振り向くと、そこにはえのぐの分身がいた。「来ないで！もう関わらないでよ！」と叫ぶえのぐに分身は言う。「何言ってるの。私はあなた自身よ。あなたの心の中から一部を複製されたのが私。私と同じものが、あなたの心の中にいるのよ。関わるも何もない」そう言うと、分身はキマイラに近づき、同化する。キマイラは暴走を始め、走り去る。それをえのぐが追いかけると、体育館についた。キマイラはえのぐの方に振り返り、分身の声で喋る。「ここが始まりだ。どうだ、あの時と比べて何か変わったのか？」えのぐは言葉に詰まり、あたりを見渡す。「典文、猫又…」静寂が満ち、えのぐの精神が限界を迎える寸前、「ニャオ」という声が聞こえる。猫又が一匹、キマイラの前に現れる。「マッタン…」と言いかけた時、猫又に続いて全ての具現化生物たちがキマイラの前に立った。えのぐは呆気に取られる。キマイラが一步二歩と後ずさる。すると、2階の窓が割れる。それと同時に匠、音色、典文の3人が飛び込んできた。

第16話

音色と匠が背後からキマイラに攻撃を仕掛け、キマイラを弾き飛ばす。そこにえのぐの具現化生物たちが続けて攻撃する。音色がとどめの一発を叩き込もうとした時、間一髪キマイラが避ける。全員えのぐの周りに集まり、キマイラと向き合う。なぜみんなここにいるのかと戸惑いながら、涙目になるえのぐ。典文曰く、えのぐの姿が見当たらないことに気づいた霊子先生が彼らに探すよう頼んだらしかった。

3人は、えのぐの様子がおかしいことに気づく。えのぐは震えながら聞く。「なんで来たの？なんで私を助けるの？」匠が答える「おまえに助けてもらったからだ。

恩人を助けないわけにはいかないだろ」

音色が答える「貴方から大切なものを貰ったから。仕返しよ。」

典文が答える「えのぐのことが大好きだからだよ。

おどおどしてるけど、素直でまっすぐで、人の為に本気になれる。

そんなえのぐが、みんな大好きなんだよ。」

キマイラが襲いかかろうとすると、割れた窓から鳳凰が現れ、えのぐたちを守る。

鳳凰の背中に乗っていた霊子先生がえのぐ達の前に降り立つ。

「どうだ？えのぐ、おまえは1人か？」首を振るえのぐ。

「じゃあもう疑うことはない。今のおまえなら、奴に打ち勝てるはずだ。」

霊子先生とみんなの顔を見て、ゆっくり深呼吸をすると、スイッチが切り替わった。えのぐはスケッチブックを取り出すと、「みんな戻っておいで」と叫ぶ。すると具現化生物たちがスケッチブックに戻えのぐは新しい絵を描き始める。典文が察して、音色と匠に時間を稼ぐよう伝える。2人が十分に時間を稼ぐと、えのぐはスケッチブックを高く掲げる。するとそこから大きな狐が具現化した。天狐はとても強力で、キマイラを追い詰める。えのぐは分身に向かって叫ぶ。「あなたのおかげで、自分の成長に気付くことができた。安心して、私はもう大丈夫だよ」分身は「ありがとう」と言い残し、消えていった。

翌日、霊子先生が神主に成果報告を行うと、神主は霊子の行いを咎める。

一色えのぐの能力がさらに高まってしまったではないか、と。

しかし霊子先生は答える。霊化能力は、危険なだけの存在ではなく、

芸術家の卵たちに与えられる、試練のようなものではないか。

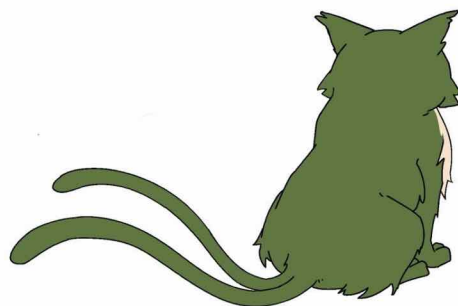
彼らが出す答えに、私たちも向き合う必要があると、と。

企画書

キャラクターデザイン	小野真依
モンスターデザイン	スガル
美術設定	田中彩恵 小野真依
小道具設定	コクイチセン 程琳
ストーリーボード	小野真依 スガル 田中彩恵
原案 脚本	山口大樹
制作日誌	鳥井玲音

PV

具現化デザイン	スガル
えのぐイラスト 匠イラスト 音色イラスト	スガル 小野真依 田中彩恵
えのぐ声優 録音協力	池優菜 柳沼先生
BGM	SHUNTA「Listener」
PV制作	山口大樹 鳥井玲音
感謝	東京クールジャパン先生方



おわり